

# 赤報隊を知っていますか

## 明治維新の陰の功労者、その中に岩手(竹中家)の志士も

### 赤報隊の結成

幕末の慶応4年(1868年)1月3日にはじまった鳥羽・伏見の戦いに勝利した新政府軍が、関東に逃走した第15代将軍徳川慶喜や旧幕府軍を討伐するため、官軍本体に先立って各地の情報探索や勤皇誘引活動を任務として組織した官軍先鋒隊の一つが赤報隊であった。

赤報隊は、薩摩藩の西郷隆盛や公家の岩倉具視らの内意を受けた綾小路俊実、滋野井公寿の二卿を擁立して、近江国松尾寺村において1月9日に結成され「赤心をもって国恩に報ぜん」という意味で隊名を赤報隊とし、三つの隊から編成され、1月15日、金剛輪寺を出発し、18日には岩手村に到着した。

㊦ 赤心=嘘いつわりのない、ありのままの心

### 竹中家と赤報隊

当時の竹中家の当主は、旗本としては最後となった14代竹中重固であった。

竹中重固は、元治元年(1864年)第1次長州征伐の際に陸軍奉行に任じられ、鳥羽・伏見の戦いにおいても旧幕府軍を率い最前線で戦うが敗れ、徳川慶喜に追隨して江戸へ逃れたことからわかるように、赤報隊から見れば、竹中家は朝敵であった。

このような状況の中で赤報隊は岩手村に進攻、激しい抵抗を予想していたが、竹中家家老児玉周左衛門は、当主竹中重固の父で前当主の重明を宮の前の祥光寺に謹慎させ、家臣の盲動を抑え、当主重固の減刑と重明に咎めが無いよう赤報隊に要請し、陣屋は平和的に明け渡された。また、官軍に対し、大砲、小銃、武器、弾薬等と軍資金を献じた。更に、北村与六郎はじめおよそ20人の従軍を願い出た。

これは、旧幕府側の者が、勤王側に転換する際の生贄的な意味合いがあったが「勤王の実効」の名の下に、このような主家のため犠牲となった人々の動きは、竹中家以外にも見られた。このことにより、主家(竹中家)とその領民の犠牲を最小限に抑えることとなった。

### 赤報隊の悲劇

1/14 年貢半減令布告→1/25 帰京命令→1/27 年貢半減令取り消し→

→二・三番隊は解散、一番隊は偽官軍として追討されることに

一番隊の相楽総三が、赤報隊を代表する形で**草莽**として「官軍之御印」の下賜と「税(年貢)の軽減」を朝廷に嘆願した結果「年貢半減令」が布告された。

これによって赤報隊は、新政府承認のもと「年貢半減令」を掲げ、官軍として東山道を進軍していった。進軍にあたって、赤報隊は、桑名城は戦わずとも官軍に落ちるとの確信があり、東海道へは進まず、先に信州に入って甲州を鎮め、後から出発する江戸東征軍の東山道総督府に協力することを決定していた。

相楽隊は、その先鋒隊として1月22日に岩手村を発った（北村与六郎をはじめとして竹中家の家臣も加わっていた）。続いて二・三番隊が出立するはずだったが、ここで二つに分かれた赤報隊は、再び合流することはなかった。

その要因は、新政府が鳥羽伏見の戦い等の軍資金三百万両（現在の約3000億円）を、大阪の豪商三井、鴻池らから「年貢取扱い権付与」を担保に借金していたため、新政府の公約である「年貢半減令」が実行不可能なものとなり「年貢半減令」を撤回する必要性が生じ、27日に密やかに取り消されたことによる。

新政府は、すでに「御一新」の旗印として「年貢半減令」を布告しながら進軍している赤報隊に京都へ戻ることを命じた。綾小路に率いられた二・三番隊は、その命に従い帰京し解隊したが、一番隊の隊長相楽総三は「碓氷峠を攻略しないと官軍は不利になる。たとえ、後に軍令に反したと言われても実利の要地を押さえないでどうする。相楽は名門も栄達も考えていない。今は、一身のことを考慮するときではありません」と言って引き返しに應じず、隊名を「官軍先鋒嚮導隊」と変え進軍を続けた。

新政府は、これを「偽官軍」とし「年貢半減令」は彼らが勝手に触れたものとして、2月10日・東山道総督府軍と信濃の各藩に赤報隊追討命令を出した。その戦いの中で岩手から赤報隊に加わった竹中家家臣の北村与六郎、児玉七五三蔵、中川源八、水野定吉らも非業の最期を遂げた。相楽総三ら幹部も、後日捕らえられ、下諏訪で処刑された。

㊤ 草莽・そうもう＝朝廷など諸侯やその体制に「臣」として忠誠を誓う在野の協力者

## 赤報隊の名誉回復（偽官軍→明治維新に功ありとして昭和3年に御贈位）

相楽総三をはじめとする赤報隊一番隊（官軍先鋒嚮導隊）の殉難の志士は、明治新政府樹立の陰の功労者であるにもかかわらず、偽官軍の汚名を着せられたため、その子孫はひげ目を感じ先祖のことを語り継ぐことを憚った。

そうした中で相楽総三の孫である木村亀太郎は、12歳の時に祖父が偽官軍の汚名を着せられ斬首となったことを知り、祖父の汚名を晴らすことに尽力することを決意した。

大正元年20歳の頃、はじめて下諏訪を訪れた。下諏訪では相楽は好人物として見られていること、相楽を偲び毎年4月3日に相楽祭が行われていたことを知り驚き喜んだ。

これを機に赤報隊に関わる資料を集め始めると共に、新政府の要人に話を聞くなどの活動を始めたが、資料があまり残っていなかったり、なかなか真実を話してくれなかったりと苦労したが、数少ない資料を基に粘り強く資料収集に取り組んだ。

木村は御贈位を受けることによって名誉が回復されると考え、大正7年、大正13年に御贈位の請願を行ったが、採択されることはなかった。

昭和3年、三度目の請願に取り組んだところ、木村の長年の粘り強い努力が新聞にも取り上げられ、有力な協力者も現れるようになり、新たな請願書を下諏訪町長と共に長野県庁へ提出した。その年の11月1日160名の御贈位が発表された。その中に「明治維新の功により正五位を贈られた相楽の名前と赤報隊隊士9名の名前があり、ついに偽官軍と言う汚名が晴らされたのであった。

㊤ 贈位＝生前に功績を挙げた者に対して、没後に位階を贈る制度（現在の叙位）

文責 鈴木準二（2020.10）



## 赤報隊に参加した志士達

(垂井町岩手 徳法寺所蔵)



## 赤報隊供養祭

(岩手の歴史と文化を守る会主催)



### 赤報隊顕彰碑

竹中重國は岩手旗本五子石の領主で、慶應四年正月三日、鳥羽伏見の戦いで陸軍奉行として幕府軍を指揮したが敗れ、朝敵となり、將軍徳川慶喜に追隨して江戸へ逃れた。

京都で勝利を得た官軍は江戸城攻撃と京より東への北陸の三道軍を編成した。

東北道軍の東征に先立ち、小田原宿野原を擁した東海道軍所属の赤報隊は三隊を編成し、年貢半減を掲げて先ず幕府軍方の岩手へ同年正月十八日総勢百五十名程で侵入した。その時の岩手領内は意外と平穏で、家老五郎左衛門が重國の父で前主君重明を宮の前祥光寺に謹慎させ家臣達の妄動を抑え、主君重國の罪の軽減と重明の咎めなきよう願ひ、官軍の要求に応じ大砲、小銃、軍資金を献じ、この赤報隊に主君を思う十数名を参加させるなどした。

同年二十二日赤報隊の三隊は前後して岩手を出立し東征へと中山道を進んだ。二十五日朝廷より赤報隊へ帰京の命令があり二番隊三番隊は鶴沼より名古屋へ出て来るを経て京へ戻った。この時点で赤報隊は解散した。新政府はこれら帰京組を一旦は拘置投獄したが、後に徴兵七番隊に採用し東北戦争に参加させた。この戦いで水野定吉・中川源八が戦死した。練小路御は相楽三準、いる一番隊に帰京を命じたが聞かず、相楽は奥山道碓氷峠占拠の重要性を認識し、隊名を「官軍先鋒赤報隊」と改称し奥に信州へ向かって進軍した。この頃官軍が取り消した年貢半減令を触れ、下諏訪に到るや、「北信分遣隊」を再編成し碓氷峠攻略の準備をしていた。たまたま横川間所受けとりの交渉中、家臣北村立一郎は坂本で敵に不意に襲われ奮戦するも力尽きて戦死し、思五七三歳も安中にて非業の死を遂げ、相楽等は捕らえられ三月三日処刑された。

赤報隊の一番隊に所属していたこれら殉難の志士は明治維新樹立の陰の功労者であり主君を思い郷土を救った思入であるが、朝敵の一家などから賊視され「偽官軍」として抹殺されたため、語り継がれることはなかった。

岩手の諸氏はこれを慨き、顕彰碑をゆかりの五層の跡に建立しその雄心を後世に伝えんとする。

予も亦この誓に感動し常に感じてその来由を叙し後の人々が鑑みること願うものである。

垂井町文化財審議会委員 桐山 悟 撰  
 岐阜県文化財保護協会会長 太田 三郎 校閲